

(合評)

## ベルクソンと現代時間哲学（上）

平	井	靖	史*
青	山	拓	央
岡	嶋	隆	佑
藤	田	尚	志
森	田	邦	久

以下は、2020年11月21日にオンラインで開催された、ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度』（藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳、書肆心水、2019年）の合評会の記録である。伝説の名講義として名を馳せたこの講義は、格好のベルクソン哲学入門であると同時に、現代的な関心からも興味深い数多くのアイデアを宿している。その射程を余すところなく展開すべく、現代分析哲学および科学哲学における時間の哲学研究の代表的な研究者である青山拓央氏（京都大学）および森田邦久氏（大阪大学）を登壇者に迎え、旧来のフランス系・分析系といった垣根を超えた哲学討議を行った。当日は質疑も含め、時間観念とその歴史をめぐって活発な議論が展開された。

分量のため上下の二篇に分けて公開するが、まずは全体の構成を以下に述べておく。冒頭で、訳者代表である藤田尚志氏（九州産業大学）から講義の意義・経緯についてイントロダクションがなされる。ついでセッション1では青山氏から、セッション2では森田氏からのコメントを受けた上で、気鋭のベルクソン研究者である岡嶋隆佑氏（新潟大学）とPBJ代表である平井靖史（福岡大学）がそれぞれ応答する。最後に全員による全体討論がある。上篇にはイントロダクションとセッション1を、下篇にはセッション2と全体討論を取めた。

---

\* 福岡大学人文学部教授

## イントロダクション：講義の意義・経緯 藤田尚志

○藤田 合評会を始めるにあたって、導入として三つの点についてお話をさせていただきます。まず一点目はPBJという今回のイベントの主催団体について。二点目は、ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義について。三点目はこの講義録の日本語版の特徴についてお話をいたします。少し駆け足になるかと思いますが、お付き合いください。

### 1. PBJの活動について

○藤田 *Projet Bergson au Japon* (英語では *Project Bergson in Japan*)、通称PBJは、日本学術振興会の科学研究費を財政的な基盤として、ベルクソンの主要著作に関する国際的な共同研究の推進およびそれによる国際的な研究ネットワークの構築を目的とするプロジェクトです。

ベルクソンには主要著作が四つあるのですが、それぞれ3年間ずつ国際的な共同研究をしてまいりました。第1期は1907年に刊行された第3の大著『創造的進化』の刊行百周年を祝う世界的な機運に乗じて2007-2009年度の3年間<sup>1</sup>。1年休んで第2期は、最後の大著『道徳と宗教の二源泉』を扱った2011-2013年度の3年間<sup>2</sup>。法政大学の安孫子信先生を中心として、金森修先生、合田正人先生、杉山直樹先生、杉村靖彦先生、檜垣立哉先生といった日本のフランス哲学研究の一線級の研究者が集い、五冊の論集をフランス語で出してきたことで、国際的な評価をある程度は頂いたと思います。

その後、福岡大学の平井靖史先生が代表になられてから大きな方向性の転換がありました。前2期の共同研究にも現代思想系やエピステモロジー系といった多様性はあったものの、大きく言えば総じて「大陸哲学」「思想史的研究」という枠組みで動いてきた

---

<sup>1</sup> 二冊の論集がフランス語で刊行された。S. Abiko, H. Fujita et N. Sugiyama (dir.), *Disséminations de L'évolution créatrice de Bergson*, Georg Olms Verlag, coll. « Europaea Memoria », 2012. S. Abiko, H. Fujita et M. Goda (dir.), *Tout ouvert : L'évolution créatrice en tous sens*, Georg Olms Verlag, coll. « Europaea Memoria », 2015.

<sup>2</sup> 三冊の論集がフランス語で刊行された。S. Abiko, A. François et C. Riquier (dir.), *Annales bergsoniennes VI : Bergson, le Japon, la catastrophe*, Paris : PUF, coll. « Épiméthée », 2013. S. Abiko, H. Fujita et Y. Sugimura (dir.), *Considérations inactuelles. Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*, Georg Olms Verlag, coll. « Europaea Memoria », 2017. S. Abiko, H. Fujita et Y. Sugimura (dir.), *Mécanique et mystique. Sur le quatrième chapitre des Deux Sources de la morale et de la religion de Bergson*, Georg Olms Verlag, coll. « Europaea Memoria », 2018.

のに対し、平井さんが代表になったことで、上述の軸以外にも、「分析形而上学」「心の哲学」といった現代英米系の分析哲学との接合や、「意識の科学」「認知心理学」「神経科学」「ロボティクス」「AI研究」といった現代諸科学との対話を主要な軸の一つに据えるようになったのです。このような私たち自身の研究姿勢を「拡張ベルクソン主義」と名付けまして、現在もおこなの方針のもとに共同研究を展開しております。

第3期PBJ（2015-2017年度）は第2の主著『物質と記憶』について3年間国際的な協同研究を行ない、その成果は三冊の論集として日本語で出版され、国内で一定の評価をいただいたと思います<sup>3</sup>。2019年に開始した現在の第4期は、最後に残った第1の主著『意識に直接与えられたものについての試論』（英訳タイトルから『時間と自由』という名前でも知られています）を中心的な研究対象として、トゥールーズ大学の研究グループと生物学者や物理学者を交えて共同研究を行ったり<sup>4</sup>、フランスの大学に世界中の分析系の若手哲学者たちが集まって創ったユニークな研究所（グルノーブル大学・記憶の哲学研究センター）で記憶に関するワークショップを共催したり<sup>5</sup>と順調なスタートを切っておりましたが、コロナ禍の影響で悪戦苦闘しております。今回の合評会も本来であれば5月に京都大学で開催される予定でしたが、結局今日まで延期し、何とか遠隔での実施にこぎつけた次第です<sup>6</sup>。PBJも期間を一年延長して2022年度まで共同研究を

<sup>3</sup> ①平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』、書肆心水、2016年。②平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する——時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』、書肆心水、2017年。③平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する——拡張ベルクソン主義の諸展望』、書肆心水、2018年。

<sup>4</sup> International Workshop “Physical Time, Biological Time: Bergsonism Today” organized by Université de Toulouse 2 - Le Mirail (laboratoire ERRAPHIS) / Université Paris Nanterre (Institut de Recherches Philosophiques - EA373), 24-25 October 2019.

<sup>5</sup> Franco-Japanese workshop “Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives” organized by PBJ and Center for Philosophy of Memory, Université Grenoble Alpes, 28-29 October 2019.

<sup>6</sup> 本合評会は、分析哲学・科学哲学の専門家にベルクソンの講義録を読み解いていただいたが、他にも古代哲学・近代哲学の専門家のご協力を賜り、以下の二つの合評会を開催することができた（敬称略）。PBJ主催「哲学と時間：ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義 時間観念の歴史』合評会」（納富信留（東京大学）・鈴木泉（東京大学））、2019年9月6日。北海道哲学会主催「ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義 時間観念の歴史』」（書肆心水）日本語版刊行記念合評会——アリストテレス・カント・19世紀フランス哲学をめぐる（蔵田伸雄（北海道大学）・三浦洋（北海道情

継続することになりましたので、何とか実りある成果を出したいと考えております。

## 2. ベルクソンの CDF 講義

○藤田 続いて、ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義についてです。ベルクソンがコレージュ・ド・フランスで行なった講義は伝説的な講義と言われておりまして、これは古い新聞記事ですが（図1）、ご覧いただいて分かるように聴衆が詰めかけ、窓の外からでもいいから講義を聴講しようとしております。



図1 当時の新聞記事

コレージュ・ド・フランス（Collège de France）はフランス固有の制度で、ごく簡単に言ってしまうと、国家が最先端の知識を一般聴衆に無料で開放するというきわめてハイレベルな「市民大学」のようなものです。1530年、まだ王国だった時代のフランスの国王フランソワ一世によって王立教授団（Collège royal）として創設されて以来、現在に至るまで連続と続いてきた制度です。

文学で言えば、ヴァレリー、ボスフォワ、ジュネット、バルト（加藤周一も招聘教授であったようです）。哲学で言えば、ベルクソン、メルロ＝ポンティ、フーコー、エティエンヌ・ジルソン。最近の哲

学者で言えば、ジル＝ガストン・グランジェ、ジャック・ブーヴレス、イアン・ハッキング、アラン・ド・リベラなどが教授になっています。他にも美学・美術史ではアンドレ・シャステル、音楽ではピエール・ブレーズ、歴史学ではジュール・ミシュレ、リュシアン・フェーヴル、フェルナン・ブローデル、人類学・社会学ではレヴィ＝ストロース、ブルデュー、アロン、ロザンヴァロン、医学・生物学ではフランソワ・ジャコブ、ジャッ

---

報大学）・村松正隆（北海道大学）、2019年12月22日。それぞれ関係誌に掲載される予定なので、関心のある向きはPBJのHPで最新情報をチェックされたい。<https://matterandmemory.jimdofree.com/>

ク・モノー、アラン・ベルトーズなどがあります。

こういった圧倒的な教授陣を抱えるコレージュ・ド・フランスでベルクソンは講義をしたわけですが、その中でも本当に人気で、どうにか講義を聴きたいという学生グループが嘆願書を出したり、あるいは使用されていた講義室には375席しかないが、700名以上が常時出席しているので、何とかソロボヌの大講堂を使わせてもらえないかといった手紙が来ていた状況でした<sup>7</sup>。

さて、コレージュの概要や著名な教授陣、ベルクソンの講義の人気ぶりといった外的な事情を一通り見た後で、徐々にこのコレージュ・ド・フランス講義の内容に入っていきます。まずは、他のベルクソンの講義録との違いです。1999年から2001年にかけて『ベルクソン講義録』というタイトルで全4巻の講義録がPBJの精神的支柱の一人である合田正人先生のご尽力によって刊行されているのですが<sup>8</sup>、これらはいずれもリセ（高校）の授業であり、高校生のノートを基にしております。もちろん高校の授業とはいっても、19世紀後半の、それもかなりのエリート校の授業ですから、授業のレベルはかなり高いものですが、やはり生徒のノートを基にしている以上、どうしても要約的な記述が続き、ベルクソン哲学の大きな魅力である生き生きとした筆致は望むべくもありません。また、過去の哲学者や思想潮流について語る際には、独自の解釈を出しているところもあるにはありますが、やはり「通常の解釈はこういうものだ」と示すこと

<sup>7</sup> 「以下に署名した者たちは、ベルクソン氏の講義に出席することを望んでおりますが、講義の二時間前には、仕事柄ずいぶん前に到着することのできる人々〔社交界の貴婦人とその従者たち〕によって、ほぼすべての席が埋まっている状況です。コレージュの運営責任者様におかれましては、学生証を所持している学生にだけ、教卓脇の入り口から入ることをお認めいただきたく…」（*Pétition des étudiants en lettres à l'Administrateur*）。「私はベルクソン氏の講義の熱心な聴講者である奥様方の声を代弁してお手紙を差し上げております。どうか40席ほど追加の席を出していただけないでしょうか？ そうすれば、奥様方も廊下に立ってではなく、講義をお聴きになれますので…」（*Lettre d'Henri Charles à l'Administrateur*, 20 février 1912）。「ベルクソン氏に割り当てられたコレージュの第8番教室は、375席しかないのに対し、常時700名以上の聴講者が出席しております。氏の講義には、〔向かいにある〕ソルボヌ大学の大講堂を使用するべきであると考えます。」（*Lettre d'Arnold Sandoz à l'Administrateur*, 12 janvier 1914）。原文はフランスのデジタル・アーカイブ Gallicaの次のURLを参照されたい。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5842649z/texteBrut

<sup>8</sup> 第I巻『心理学講義・形而上学講義』（1999年）、第II巻『美学講義 道徳学・心理学・形而上学講義』（2000年）は谷口博史との共訳、第III巻（2000年）『近代哲学史講義 靈魂論講義』は江川隆男と、第IV巻（2001年）『ギリシャ哲学講義』は高橋聡一郎との共訳。出版はいずれも法政大学出版局。

が多いように思います。

それに対して今回翻訳を刊行したコレージュ・ド・フランス講義『時間観念の歴史』は、学生のとったノート（授業の要約）ではなく、速記者による速記録を基にしておりますので、情報量が圧倒的に違います。ベルクソンの語ったことが文字通りほぼすべて入っており、緻密なディテールがすべて鮮明に読み取れるので、あたかもベルクソンの肉声が聴こえるかのようだと言ったとしてもさほど誇張にはならないでしょう。今までモノクロで見えていたものがカラーで、サイレントだったものがトーキーで、静止画だったものが動画で見えるような感覚とさえいえるでしょう。これは二つの講義録を読み比べてみればはっきりとわかると思いますので、ぜひご自身で試してみてください。音楽で言えば、臨場感に満ちたライブ盤のようなものであるという点、これが第一の特徴です。

それから、壮年期の講義であるという点も見逃せないところです。今までの講義録は、ほぼ1880年代後半から1890年代前半に行われた授業であるのに対して、今回邦訳が出版されたコレージュの講義録は、そのほぼ10年後の1902-1903年度に語られたものです。きわめてクリアに聞こえてきたとしても、それが大した内容でなければどうしようもありませんが、『物質と記憶』（1896年）や『笑い』（1900年）を書き上げ、『創造的進化』（1907年）へと向かおうとしていたベルクソンは、本格的に自己の哲学を形成しつつあるまさにその渦中であって、自らが切り開きつつあった「時間の哲学」「自由の哲学」「生命の哲学」の最前線を講義していたのです。ベルクソンにおける持続・自由・意識・因果性について考えるうえで、この講義録を読むことで得られる情報はたくさんあります。ベルクソン哲学の生成過程を知るという点でも非常に重要な講義であるということ、これが二つ目の特徴です。

三つ目の特徴は、この講義録『時間観念の歴史』で披歴されているベルクソンの哲学史観はかなり独特なものであるということです。時間もないので、箇条書き的に列挙すれば、哲学の歴史は時間の忘却の歴史であると読み解いている点。ハイデガーの「存在の忘却の歴史としての哲学史」のベルクソン版だと思っていたらいいかと思えます（時系列で言えば、ハイデガーの方が後ですが）。ギリシア哲学史が非常に大きな部分を占めているという点（これは彼が担当していた講座が「ギリシア・ローマ哲学」であったことが大きく関係しているのでしょう）。数学や物理学の哲学といった側面もちらりと垣間見せているという点。近世哲学、たとえばライブニッツについても独自の（辛辣

な）解釈を加えているという点。

青山さんのところで詳しくご紹介があると思いますので、ここでは簡単に進めさせていただきますが、ベルクソンの哲学史観の中でも二点だけ強調しておくとして、一つ目はプロティノスです。先ほどギリシア哲学に大きな比重がかけられていると指摘しましたが、とりわけプロティノスに非常に大きな役割が与えられています。プラトンやアリストテレスではなく、プロティノスのところで大きな転回が生じる、とベルクソンは言うのです。

二つ目は、時間の哲学史に科学者たちをたくさん取り入れているということです。これはベルクソンの著作の中ではあまりはっきり見えていなかった点で、著作の中では「近世の科学は」と一言で語られているだけで<sup>9</sup> その背後のことはあまりよく分かっていなかったのですが、今回この講義録の第16講をご一読いただければ分かるように、ベルクソンはベネデッティ、ガリレオ、カヴァリエリ、ガリレオ、ロベルヴァル、パロー、ニュートンといった数学者・物理学者たちについて、時にテキストを実際に読解してみせながら、彼らの運動に関するヴィジョンや無限小理解を検討し、そこから「線の形而上学」や「計算の形而上学」を取り出そうとしています。「純粹持続の中に投げ入れられた測深器」としての実証科学とその歴史についての極度に切り詰められた記述は、こういった講義での試行錯誤に裏打ちされており、それらの驚くほど豊饒なアイデアに満ちたさまざまな考察が惜しげもなく展開されていた場所がコレージュ・ド・フランス講義であったということです。

例えばこの講義録の第16講ではベネデッティという人物が非常に大きく取り上げられているのですが、この数学者はベルクソン自身が書いたものには（雑文や書簡まで含めても）一度も登場しません。ただこの講義にだけ登場するのです。したがってベルクソンが時間の哲学史においてこの数学者に大きな役割を与えており、アリストテレスからの大きな転換がベネデッティのところで起こったと（少なくとも1902-1903年の段階

<sup>9</sup> 「近世の科学は動きが独立の実体として確立された日に始まる。ガリレイが斜面上に球を転がし、(…) 運動そのものをそれ自体のうちに研究しようと固く決心した日に始まる。このことは、科学の歴史における孤立した出来事ではない。偉大な発見の数々、少なくとも実証科学を變貌させ、または新しい実証科学を創造した発見の数々は、それぞれが純粹持続の中に投げ入れられた測深器であると私は思う。測深器が深く下れば下るほど、それが触れる実在は生命に満ちている」(PM, 218. ベルクソン『思考と動き』(原章二訳)、平凡社ライブラリー、297-298頁)。



では)考えていたという、著作だけ読んでいてはまったく分かりようのなかったことが、この講義録を読むことで見えてくるのです。

### 3. 日本語版の特徴

○藤田 さて最後に、日本語版オリジナルの特徴をご紹介します。原書であるフランス語版と日本語版のあいだには、実は大きな違いが幾つかあるのです。

まず一つ目の工夫は、各講のタイトル、小見出しを付けたということです。元々のフランス語版の目次では、17ページから339ページまで、ただ「講義」と書いてあるだけです(図2)。校訂者のカミーユ・リキエは親しい友人ですので苦笑して許してくれると思いますが、中身がまったく分からず、目次としては何の役にも立ちません(笑)。

それをわれわれは、第1講「相対的な知と絶対的な知」、第2講「記号による知」といった具合に、内容を示すタイトルを付け、さらにそれぞれの講の内容については、ベルクソン自身の著作やラカンの『セミネール』を参考に、幾つかのまとまりに区切って小見出しを付け、分かりやすく中身を分節化しました(図3)。もちろんタイトルの付け方や区切り方に異議のある方もいらっしゃるでしょうが、それは我々が責任をもって引き受けるほかないことだと思います。

TABLE

Présentation, <i>par Camille Riquier</i>	7
Cours au Collège de France 1902-1903	17
Annexes	339
Notes, <i>par Camille Riquier</i>	353
Index des noms	391

図2 原著目次(全体)



	凡例（訳者）	15
	校訂者序	カミーユ・リキエ 17
	目次	
第1講	相対的な知と絶対的な知	一九〇二年二月五日 26
	第一の例——英語の発音とフランス人学習者	27
	第二の例——絶対運動と相対運動	28
	第三の例——小説家と登場人物	30
	第四の例——生命活動と生物学者	32
	内側から知るか、外側から知るか	33
	単純なものと複合されたもの	36
	四つの例に即した「無限」概念の検討	38
第2講	記号による知	一九〇二年二月二日 42
	記号とは何か（第一の一般的事例——外国語の発音）	42
	第一の特徴——一般性	44
	第二の特徴——行動誘導性	45
	第三の特徴——固定性	47
	第二の物理的事例——運動と軌跡	48
	第三の心理的事例——登場人物と描写	52
	第四の生命的事例——進化論とダーウイニズム	55

図3 訳書目次（一部）

二つ目の工夫は、画像や図の追加です。これも大したことはないと思われるかもしれませんが、けっこう苦勞するところです。例えば、ベルクソンの講義の雰囲気伝える有名な文章が、校訂者序で引用されています。それによれば、満席の講義に何とか潜り込むべく、聴講者たちは直前に行われていた講義にまで出席していたようですが、彼らは「盲人の横で〔施しを得るために〕腕を啜えた犬のような、善良そうな」教授の顔を見つめ続けねばならなかったと書いてあります。しかし、これでは何のことかまったく分かりません。それで、こういう感じだと実物を見せれば何となく分かっていたのではないかということで、図像を一生懸命探しました（これは邦訳342頁をご覧ください）。

図も幾つか追加しました。例えば、ゼノンのパラドックスを解説するときに、こういう図（図4）が原書では書かれているのですが、やはり日本人の目から見ればきわめて不親切な図と言わざるをえません。邦訳ではこれを改修して分かりやすくしています（図5）。

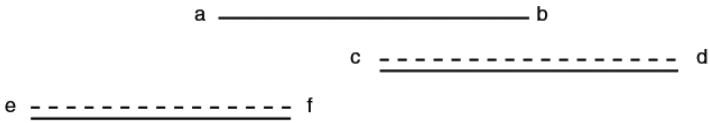
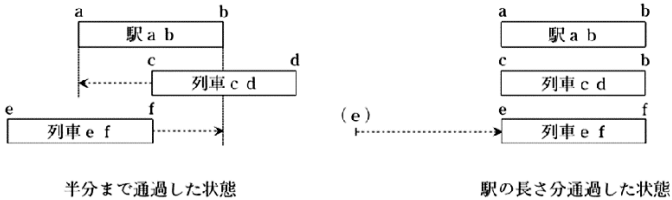


図4 原著の図 (例)



(原書の図を改修)

図5 訳書の図 (例)

あるいはアリストテレスについて、文章で説明されているだけで非常に分かりにくいところに対して、われわれで作図をしています (邦訳 141 頁)。ベネデッティに関しても同じことで、文章だけで、またこれが文章だけだと非常に分かりにくいのですが、それに対して作図をするといった工夫を入れました (邦訳 266 頁)。

三つ目の工夫は、注もかなり追加したということです。ももとの注が 339 あったのですが、200 ぐらい追加して全部で 534 の注になったのですが、これも必要な手続きでした。というのも、フランス語だと読者が自分で推測できるようなところでも、日本語だと難しいというところが多々あります。例えば *relatif à* という表現があります。これは日本語では「～に関して」と訳せる慣用句ですが、もし *relatif* と *à* のあいだにカンマがあるのであれば、*relatif* までで「相対的な」と訳すこともできます。カンマがあるのかないのか (話者がどちらのつもりで言ったのか) は速記録では決定不可能なことであり、邦訳ではなおのこと、このような事情を訳注なしには説明できません。フランス語であれば推測可能であるところが、日本語に置き換わることで注を一つ入れないと分からなくなるということです。

また例えば、*spécialisé* と書いてあっても、本当は *spatialisé* と言ったのではないか

といったことは、フランス語話者の専門家であれば音から推測することが可能ですが、日本語では「専門的な」と「空間化された」とまったく違う語に訳されてしまうので、ここでもやはり訳注が必要になります。

もう一つだけ例を挙げれば、mouvement（運動）と速記で書いてあるところに、ギリシア語で *vōv* と併記されており、maintenant（今）の間違いであると分かるという箇所があります。フランス語の字面を見たり音を聞くとはとなく似ているので推測可能かもしれませんが、日本語に置き換わってしまうと、「運動」という文字を読んで「今」を推測するのはまず不可能なので、こういったことも注記する必要があるわけです。

四つ目の工夫は、マトンの指摘を大幅に取り入れたということです。シルヴァン・マトン（Sylvain Matton）という人が講義録の刊行後に、ギリシア語やラテン語の間違いといった不備を詳細に批判した、ほとんど校訂のような論文を書いていまして、講義録の精度を上げるためにそれを取り入れて修正しています。

最後に五つ目の工夫は、プロティノスの翻訳に関するものです。原書であるフランス語版には、①ギリシア語（とそのラテン文字転記）、②ベルクソンによる逐語訳と③ブレイエによる翻訳が記されているのですが、日本語版では、①ギリシア語原文（ラテン語転記なし）、②ベルクソン訳の日本語訳、③ブレイエ訳の日本語訳にプラスして、④『プロティノス全集』の当該部分を加えています。なぜそんな煩瑣なことをしたかという、プロティノスの文章をご存知の方なら分かっていただけだと思いますが、なかなか骨の折れる文章であるからです。なので、なるべくいろいろな手掛かりを提供してご自分でいろいろ考えていただけるようなエディションを目指したというわけです。

このように私たちの工夫がたくさん詰まったこの講義録、とても読みやすいとご好評もいただいております<sup>10</sup>。ぜひ実際に手に取ってお読みいただければ幸いです。

以上、予定通り 20 分でこの講義録を取り巻く外堀はおおよそ埋めたことになるかと思えます。いよいよこの講義録の核心に迫っていくことに致しましょう。では、青山さん、よろしく願い致します。

---

<sup>10</sup> 杉山直樹（学習院大学）による書評が『図書新聞』第 3422 号（2019 年 11 月 9 日）3 面に、澤田直（立教大学）による書評が『ふらんす』2019 年 12 月号 62 頁に掲載された。

## セッション 1

コメント プロティノスから何を受け継ぐか 青山拓央

○青山 よろしくお願ひします。私はベルクソンの初学者なので、初学者らしい立場からいろいろ聞いてみたいと思っています。

まず、本の全体の印象です。ベルクソンの哲学をいったん通過させ、ろ過したうえでさまざまな哲学史が語られていて、それがひじょうに魅力的です。日本語の訳も読みやすく、美しいため、ベルクソンの初学者にも強く勧められる一冊です。

本書を読んであらためて感じたことですが、「哲学者」というと、哲学者たちが共通して持っている単一の時間概念のようなものがあるのだと誤解されることがよくあります。本書は、専門外の人々にとっても、「哲学者たちの一つの時間」なるものがあるわけではない、ということ学べる講義録になっていると思います。

連続講義の真ん中の辺り、第 11 講から第 14 講にかけて、プロティノスの話が四講ぶん出てきます。私はここを中心に問題提起をしていきますが、その前に、プロティノス論の前後における講義内容を簡単に見ておきましょう。

本書の第 1 講から第 4 講にかけては、ベルクソン自身の時間論のダイジェストのようなものになっています。そして、その後の講義では、プラトン、アリストテレスの時間論が解説されます。ベルクソンの解釈によれば、プロティノスの時間論は、プラトン、アリストテレスの時間論を発展させたものであるとされるのです。

適宜、引用を読みながら、話を進めていきましょう。

本当の問題は次のことだったのです。それはプラトンに対して課されるべきだった問題です。(118 頁)

どうしてアイデアが存在するのかということが問題となっていたわけではないのです。[...] そうではなく、問題は、どうして事物があるのか、どうしてアイデア以外のものが存在するのかということだったのです。(118 頁)

ここで「アイデア」と言われているもの、また、その後の講義においてもアイデアに近いかたちで捉えられている概念は、完全なもの、睿智的なもの、体系的なもの結びつけられています。そして、ベルクソンの解するプラトンにとっては、そうしたもの(イ

デア）が存在することは自明であり、むしろ、そうしたもののから他のものがどうやって「出てくる」かということこそが真の問題となります。

どのようにしてアイデアから諸事物への移行、つまり永遠から時間への移行が果たされるのか、[...] プラトンにおいてこの問題の解決はまったくもって神話的な解決である（181頁）

アイデアから諸事物が出てくるのが、ここでは、永遠から時間が出てくることに言い換えられて問いを形成しています。ただし、プラトンによるこの問いへの答えは、神話的なものに留まっている、というのがベルクソンの評価です。では、アリストテレスについてはどうでしょうか。

アリストテレスの因果理論を認めるのであれば、叡智的なものからの感性的なものへの派生は自ずから、因果理論によって説明されることになります。（120頁）

ベルクソンの解するアリストテレスによると、ある種の因果理論——「因果」という言葉で一般に想像されるものと違いもあるのですが——のもとで、永遠から時間への移行は説明されます。そして、この説明の構図は、プロティノスの哲学においてより発展させられていきます。

プロティノス論の後に続く、第15講から第19講までに目を向けましょう。そこではまず、近世の科学の話がされています。そして、デカルト、ライプニッツ、カントの解説が続くのですが、彼らの時間論（デカルトについてはその半分）もまた、プロティノスの哲学の延長上にあるものとして解釈されています。結局、著名な哲学者たちによる時間論のほとんどが、永遠から出発して永遠ではない時間にどうやって移行するか、という試みとして解釈されているということです。

これに対し、ベルクソン自身はいわゆる「持続」を重んじる哲学の提唱者ですので、永遠から出発するプラト的な方針には否定的です。内的に知られた持続というものを出発点に置こうとするのです。なお、ベルクソンの見立てでは、近世の科学者による「無限小」の理解には、内的な持続からの出発という観点がすでにくらか含まれているといいます。その議論には疑わしい部分もあるのですが、これがどの程度正しいのか

は、それ自体として独立した面白い議題だと思います。

### 時間についての三つの疑問

それでは、私からの本書に対する問題提起に移ります。プロティノスについての連続講義の箇所は饒舌でとても魅力的なのですが、他方で、結局のところ、その内容のどこまでをバルクソンが肯定し、どこまでを否定しているのかがつかみづらい部分があります。たとえば、プロティノスの議論から「持続からの出発」の萌芽、つまり、意識と時間とに注目する哲学の萌芽が読み取れるのだと本書では述べられていますが、これをどのくらい真に受けてよいのか。そもそものスタンスとして、永遠から出発するプロティノスに対し、バルクソン自身は持続から出発するという、決定的な違いがある。そのうえで、バルクソンがプロティノスの議論のなかから、いわば「いいとこ取り」のようなことを整合的にできるのかというのが、私がとくに知りたいことです。

プロティノスの思想において、これら二つの問題 [意識と時間の問題] は切り離すことができないものです。[...] プロティノスにおいて意識とは、ある独特の展開 (déroulement)、すなわちアイデアが展開し繰り返し広げられたものであるからです。(195 頁。角括弧内は引用者。)

プロティノスにとって、それは減じられるものです。それは否定的な随伴であり、意識とは暗くするものなのです。(197 頁)

常識的な発想と異なり、増やされるかたちで展開するのではなくて減じられるかたちで展開するというのが、ひじょうに面白いところですが。アイデアがいわば「暗く」になっていく——、否定的な随伴によって減じられ、暗くなっていくことで、意識や時間が生み出されてくるという、独特の発想がここにはあります。

意識とは [...] 自己の大部分についての忘却であり、一点へと注意を固定すること (202 頁)

私たちが最も意識を有しているものは、私たちから最も疎遠なもの (206 頁)

彼が語の本来の意味で思考と呼ぶものは […] 観念をもつことではなく、そのアイデアになること、そのアイデアと合致することなのです。（204 頁）

たとえば美について、それを本来的に思考したときには、私は美のアイデアそのものになる——。これに対して、私が意識を有しているものは、私から疎遠です。たとえば私が健康なときには、まさにそれになりきっているために意識がそれに向かわないけれども、健康から疎遠になる（病気になったり怪我をしたりする）と、そのことに意識が向かいます。このようなプロティノスの洞察は、先述した、「減じられていくことによって意識が出てくる」という話と結びつけて理解されるべきものです。

さて、ここから、意識の生成と時間の生成との結びつきを見ていきたいのですが、そのために、ある円錐を描いた図を使うことにしましょう。これは、本書に描かれていた図（226 頁）を、説明文を添えて私が描き写したものです（図6）。

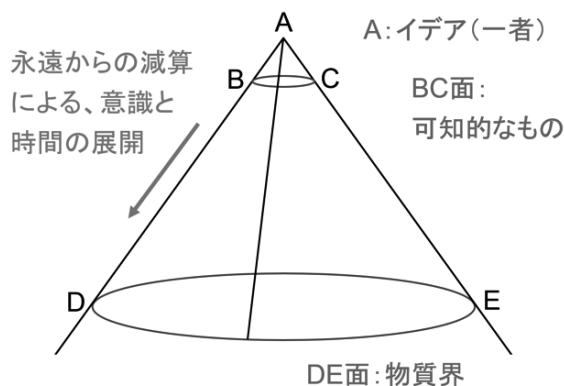


図6 プロティノスの円錐図

円錐の頂点に位置する A にプロティノスの言う「一者」というものがあり、私はこれを分かりやすく「アイデア」と書き換えています（厳密に言うと、この書き換えは少し不正確かもしれませんが）。A のすぐそばには BC の面があり、ずっと遠いところには DE の面があります。A の位置に一者という、永遠的で体系的な、いわば完全なるもの



があって、そこから下に遠ざかるほどこの完全性から離れていく。A から遠ざかって B に行き、B からさらに遠ざかって D に行く——、この過程でアイデアはだんだん暗くなっていき、その「減算」の働きによって意識と時間とが（ベルクソンの言えば「持続」が）展開されていきます。というも、プロティノスにとって、「時間のあるところには魂があり、時間とは魂そのもの」（220 頁）だからです。

なお、この図では DE の面が円錐のほとんど底のほうにあり、それが物質界、つまり物質の世界に対応するものとされています。一者から遠ざかることで意識と時間とが現れ、さらに遠ざかることによって物質界が現れる、という構図になっているのです。

そして、BC の面は、アイデアを「可知的なもの」として捉える運動に関わっています。アイデアが可知的なものとして捉えられるとき、アイデアは A から出来し、わずかにそこから遠ざかった BC の面で捉えられるのですが、すぐまた A に回帰する運動があるというのです。ですから、A の位置にこそ真に純粋な一者があるけれども、それが可知的なものとなるときには、すでにわずかな減算がなされています（意識は減算の働きによる、という先述の話をここでも思い出してください）。

それでは、ここまでの解説をふまえて、三つの疑問を挙げてみます。まず、一つ目の疑問として、減算による意識の生成と時間の生成は、本当にパラレルに説明できるのか？ たとえば、本書の説明では、時間の系列性がいかに生じるのかが不明ですが、系列性を持たない諸持続は、まだ時間とは見なせません。また、さきほどの図では円錐の斜辺に減算の矢印が描かれていましたが、あれは断じて時間の系列性を表す矢印ではありません。

そして、このことと関係する二つ目の疑問として、一者における「永遠」は時間の系列性を持つのか？ もし、それが初めから系列性を持っているなら、一つ目の私の疑問への答えは直ちに与えられます。なお、現代の〈時間の哲学〉では、永遠主義（永久主義）という立場の成否がしばしば論じられますが、そこで言われる「永遠」は時間の系列性を持っていると見なされます。そこでは、現在という特別な時点の存在が否定されるものの、諸出来事の先後関係——その関係は永遠に不変です——は存在し、そこには系列性があるからです（それは本当に「時間の」系列性なのか、という哲学者マクタガートに由来する疑問については、いまは立ち入りません）。

三つ目の疑問は、「永遠からの出発」の観点に留まる限り、減算による持続の生成論は内在的には整合的に見える、ということ、読者はどう評価したらよいかというも

のです。ただし、内在的には整合的に見えるといっても、ここには、訳者解説の注4にも記されている、「永遠から時間が生じる過程を、時間的に描くこと」（424頁）の問題があります。永遠からの時間の生成論を本当に語ろうとするならば、その生成は、生成後の時間の概念では語れません。これは、昔の哲学だけでなく、今日でも、たとえば脳の働きから時間の生成を説明するとか、そういった話にも現れてくる問題ですが、時間はどうつくられるのかという話を、われわれは思わず時間的に語ってしまうのです（因果性が時間性を招来することによって、なお）。この円錐の図で言えば、Aから「遠ざかっていく」と言うけれども、この「遠ざかり」を時間的変化として語ってしまっただけでは台無しになる側面があるわけです。

### 自由の三つの位相について

さて、ここから、プロティノスの自由論が三つの位相を持つ、という話に移っていきたいのですが、その前に、訳者解説からの次の引用を読むことにしましょう。

プロティノスは、時間論においては永遠本位のフレームに属しながらも、現象的意識というパースペクティブから、自由という極めて近代的な問題に直面してしまっている。当然、両者はフィットしない。そこでプロティノスは前者に取り込める形で自由の問題を書き換えることを試みるが、それはもはや彼が見出したはずの自由ではなくなってしまふ……。 (417頁)

まさに、ここで述べられた問題ゆえに、プロティノスは自由についての三つの位相を渡り行くこととなります。では、ベルクソンの講義録から、その「第一の位相」について解説した箇所を引用します。

自由の問題を立てる意識というものから出発して、人はまず良くも悪くも自由を時間のうちに探し求めます。そして、この時間のうちでの自由を手に入れることができるのはただ、私たちの魂に自然法則のメカニズムを断ち切る力能を付与するという条件の下でのことにすぎないということ、しかしながら、私たちの魂にそうした力能が付与されることなどありえないということに気づかされるのです。(246頁)

この箇所にて、「私たちの魂に自然法則のメカニズムを断ち切る力能を付与」する必要があるとされるのは、なぜでしょうか。それは、持続を現実のものとなすとき、「人は先行する事柄に対して何かを、それも絶対的に新たな何かを付け加える」(235頁)のであり、そこにこそ意識によって与えられた事実としての自由があると、ベルクソンが考えているためです。

ただし、ここには、今日の自由意志論におけるリバタリアンたちにも引き継がれている重大な困難があるのでした。先行する事柄に絶対的に新たな何かを付け加える、などということが、自然法則を破ることなしに可能であるのか。とりわけ、プロティノスの図式で言えば一者からの減算によって持続が生成するのですから、持続に自然法則を断ち切るような力が与えられるのは奇妙です。なぜなら、絶対的で体系立ったものから減算がなされただけなのですから。

そこで、第二の位相が登場します。自然のメカニズムをまずは事実として認めたうえで、自由とは、自然がなすのと同じことを魂もなすことのうちに存する、と考える位相です。ベルクソンは、この第二の位相を「予定調和の位相」とも呼んでいます。自然がなすことと魂がなすことは同一であり、そこに予定調和があるわけです。今日の自由意志論の図式で言えば、これは両立主義の立場に似ています。

なお、自然と魂とが予定調和することは、プロティノスの哲学においてはけっして偶然ではありません。なぜなら、身体であれ意識であれ、それらは一者からの減算によって生成したものであり、いわば同一の根を持つのであって、それらが予定調和し合うかたちにつくられていたとしても不思議はないからです。

とはいえ、プロティノスはこの第二の位相に留まることはしませんでした。さきほど円錐の図を見た際に言及した「可知的なもの」——、一者のごく近傍にあるこの可知的なものの位置にまで自由を押し上げることにより、プロティノスは第三の位相に至ります。「自由を維持したいのであれば、それを必然性そのものと同一視し、その必然性を可知的なものの存在そのものと合致させる」(246-247頁)のでなければならない。このスピノザ風の位相において、自由はすっかり、「永遠からの出発」の観点に整合的なものに変形させられており、ベルクソンはこの点を否定的に評価します。前掲の訳者解説での表現を借りれば、「それはもはや彼（プロティノス）が見出したはずの自由ではない」というわけです。

それでは、プロティノスの自由論についても、私の疑問を挙げておきましょう。一つ

目の疑問は、意識が持続のうちで与える自由（いわゆる現象的な自由）から自由についての思索を始めたとしても、結論がそこに回帰しないことは可能ではないか、というものです。一般論として、スタートとゴールが異なることは哲学の議論においてよくあることであり、それは矛盾ではなく、思索に必要な道程です。たとえば自由に関して、自由意志へのリバタリアンの直観からスタートしたけれども、あれこれ思索した結果、そんなリバタリアンの自由はないという結論に至ることは珍しくありません。

また、第三の位相におけるスピノザ風の自由論ですが、こちらも——減算による持続の生成論と同様——「永遠からの出発」の観点に留まる限り、内在的には整合的に見えます。今日の日から見ればやはり、よく分からない部分や不思議な部分はあるのですが、内在的に明らかな矛盾があるようには思われません。私の二つ目の疑問は、ベルクソンによる第三の位相論への批判の根拠は、結局のところ、彼が外部から持ち込んだ自由への直観にすぎないのか、というものです。もちろん、ある議論に対して外在的な批判をすることは構わないのですが、その場合には、根拠の外在性を明言したほうがよいでしょう。とりわけ、ベルクソンがプロティノスからいわば「いいとこ取り」を企図しているのなら、内在的批判と外在的批判との峻別は重要です。

以上、この講義録に対していくつかの疑問を述べてきましたが、最後にそれらをひとことで次のようにまとめておきます。永遠から出発することを拒否しつつ、ベルクソンやわれわれは、プロティノスから何をどんなふうを受け継ぐことができるのか？ 今日とはとくにこの点について、お話を聞きたいと思います。

○藤田 ありがとうございます。非常に鋭いご指摘です。それから、やはり最初に非常に分かりやすく講義の内容全体をまとめていただいたので、今後の議論にも非常に役立つご発表だったかと思えます。

では、この青山さんのご発表を受けて、まずは岡嶋さんからリプライをお願いします。

#### リプライ 岡嶋隆佑

○岡嶋 私は今年、博論を出したばかりなのですが、実は青山さんと提出先が同じで、慶應の斎藤慶典先生のところでした。青山さんの書くものには以前から関心があったので、今日はこういう形で一緒にできて非常にうれしく思っています。

今日は事前に質問を頂けたので、平井さんとも少し打ち合わせをしたのですが、私からは講義録の中身に関わる観点から少しリプライをして、それから平井さんに、より現代の観点から答えてもらうという形にしたいと思います。

始めます。私からは大きく二つの観点に分けてリプライをしたいと思います。一つは哲学史研究の動機ということで、ベルクソンがそもそもこの講義で歴史を扱っているわけですが、それがどういうモチベーションの下で行われているのかという点です。もう一つは、青山さんも説明してくださっていたプロティノス解釈についてで、いくつかの論点についてもう少し踏み入ったことをお話しできればと考えています。

### 何のための哲学史研究か

最初の論点は、青山さんのスライドの半ば頃にあった、「永遠から出発を拒みつつプロティノスによる時間と意識の分析を持続からの出発の萌芽として、いわば良いところ取りとして受け継ぐことなどできるのか」というご質問にかんしてです。同じ箇所でも、この講義で結局ベルクソンはプロティノスをどう評価しているのかが分かりにくいという疑問も提示されていたと思います。これはもっともな疑問だと思います。

ただ、この疑問に答えるためには、ベルクソンがそもそもこの講義でなぜ哲学の歴史を取り上げ直しているのか、この点を確認・共有しておいたほうが良いと思うので、ここからお話したいと思います。

これについては第14講の最後、プロティノスの自由論を論じる場面でベルクソン自身が比較的分かりやすい形で述べています。この引用は藤田さんも後書きで取り上げられていたはずですが。

引用します。「プロティノスの自由論の中には既に私が仄めかしてきたある命題に対して、少なくとも部分的に証明として役立つものが見出される。その命題とは、哲学的問題の多く、哲学において克服不可能であると思われる困難の多くは、事物の本性、ひいては人間精神の本性にさえ起因しているわけではなく、むしろある種の偶発的な状況に、すなわち歴史の中で人が問いを立て、解決するに至ってきた仕方から起因するという命題です」。普通、哲学の困難は、世界や事物、あるいは人間の精神の側にあり、それに由来するものだと捉えられているけれども、そうではなくて、問いの立て方が悪いせいで解決不能な問題が生じてしまう、そういうことが言われています。

これはこの講義に限らず、『試論』以来、ベルクソンの基本的なスタンスと言って良

くて、ここではその観点から歴史が取り上げられているということです。

続く箇所から引用します。「このような場合、ある問題の来歴を歴史的に説明すること、いかにして人が問題をある特定の形式で立てるに至ったのか、その形式で問題を立てているからこそ解決が困難で、いわば不可能なものとなっている次第を示すこと、これがつまりは問題の来歴を歴史的に説明することなのですが、これはほとんど問題を解決するということです。自由の問題に関しても事情は同じです」（235頁）。先ほど言った問いの立て方にも歴史的な経緯がある。だから、それを解きほぐして、どこで道を誤ったのかを指摘してやれば困難も消え去ってしまうということです。

この講義は、全体としてはそういうスタンスで書かれていると思いますが、プロティノスの中でも重視されているのは———これはベルクソンの見立てですが———、自由の問題を初めて明確に提起して、一定の解決を与えたのが彼だったからです。「プロティノス以前、自由の問題が明確に立てられたことはなかった」（234頁）とベルクソンは言っています。もちろんプロティノス以前にも関連する事柄はいろいろ論じられているのですが、明確に問いとして提起して解決まで与えたのはプロティノスが初めてだったというのがベルクソンの見解です。

ベルクソンのここでの動機は、プロティノスの自由論の困難を、問いの立て方も含めて指摘することで、自由の問題を歴史的な起源において解消してやること、そして、ここは少し私の解釈も入るのですが、持続について、あるいは自由についての自分の考えをある程度擁護・正当化すること、これがここでプロティノスを読んでいる動機だと私は思っています。

少し補足しておく、この講義が行われたのは既にベルクソンが自分の哲学を確立し終えた、し終えたと言ってしまうと、『創造的進化』の前なので少し問題かもしれませんが、ともかくすでに自分の考えをはっきり持っていた時期です。このことは訳者解説などでも指摘されていたかと思えます。

先ほど紹介もあった、それ以前にリセで行われていた講義などを見ても、カリキュラムの制約はもちろんあるのですが、基本的には学説の紹介という印象が強いです。ただ、この講義では、読めば皆さんも分かると思いますが、かなり自分の考えが前に出ている。だから講義全体として、あるいは歴史を研究することに関しては、ある程度自分の主張を擁護する側面もあるのではないかと私は思っています。そのための手段が、哲学史を解釈して、初期の段階で問題をつぶしておくというものではないかという

ことです。

だから意識と時間についての解釈は、まずはアイデアの継承・引き継ぎというよりは、そうしたモチベーションの中で理解するのが適切ではないかと思っています。これだけだと、ベルクソンになじみのない方には分かりにくいと思うので、もう少し具体的に説明してみます。

実際に講義でのプロティノス解釈を読んで、それをほかのベルクソンの著作と照らし合わせてみると、最初の著作である『試論』の構成と似ていることに気づかれた方もいるのではないのでしょうか。『試論』は、第2章で持続と空間化された時間を区別した上で、第3章で決定論と自由意志説の対立を解消することを目的としていました。ここで自由意志というのは、この分岐図に典型的に表されるようなものです（図7は『試論』、カドリージュ版の133頁にあるものです）。

これは意識状態の変化を表現した図なのですが、Mから出発した自我がOで立ち止まって等しく可能な選択肢OX、OYのどちらかを選ぶ能力を『試論』は自由意志と見なしていました。そういう意味での自由意志と、それを否定する決定論の対立の解消が著作全体問題です。

このことを念頭にプロティノス解釈を見てみると、講義の中ではプロティノス哲学のうちに自然法則と魂の内的エネルギーと呼ばれるものの対立が見いだされて、その解消の失敗の要因として、実在と概念の混同が指摘されているという点に目が止まるかと思います。

実在と概念の混同はどういうふうに行われるかということ、先ほど青山さんも説明して下さっていたように、自然法則と魂の内的エネルギーの対立が第一の段階と見なされていて、その後でそれがどのように解消されるかということで、個体的な魂と宇宙靈魂の予定調和が第二の段階として問題となります。これは先ほども引用されていた場所です。「魂は自然法則のメカニズムを断ち切ることなく、もっぱら自らのみを持みとするようになっていきます。この意味で魂は自由なのです」（244頁）。魂も魂で、自分でも自然のすることを反復するので、両者の間には予定調和があるということです。

このステップで、少なくとも第一の段階で見られた、自由意志に相当するような内的



図7 分岐図（ベルクソン『試論』より）



なエネルギーは、自然法則の必然性のほうにある程度回収されてしまっています。これが終わると、先ほど紹介があった第三の段階に至って、「自由とは、純然たる可知的なものの状態、もっぱら自分により恃む限りでの永遠的なものとしての純粹に可知的なものとの状態です」（246頁）と言われます。こうすると、自由意志・内的エネルギーのようなものは、可知的なものに完全に回収されて、永遠的なものの方が自由として定義されることになってしまいます。

結論として、「全古代哲学は、実在を概念のうちに、時間の外に探さなければならないという原理に基づいている」（247頁）とベルクソンは言います。

今言った原理を捨て去ることができれば、本来そこに最初からあったはずの事実が真の自由として認められるのではないかという形でベルクソンは個々の哲学者の解釈を進めていると、私は少なくとも理解しています。ベルクソンにとっての自由は、先ほども少し紹介があったのですが、『試論』では自由行為と呼ばれるものです。また全体討議で時間があれば紹介したいと思います。ここからの議論に関係する話ではないので、ここではベルクソンが一般的に自由意志と呼ばれているものとは違う形で自由概念を捉え直したという点だけ思い出していただければ十分です。少しだけ紹介しておけば、行為にどれぐらい自我が表現されているか、表現としての自由という発想が、『試論』における真の自由でした。いま述べた原理を捨て去ることができれば、そうした意味での自由が認められるようになるのではないか、ということです。

ここで青山さんのコメントに戻ると、自由の直観が外部から持ち込まれたものではないかという指摘がありました。それは確かにそのとおりのかもしれません。それには今見たような歴史を読むという意味での動機があると、ひとまずは答えることができるかと思えます。

### ベルクソンによるプロティノスの評価

とはいえ、ここで終わってしまうと、単に観点が違うのだという話にも聞こえてしまうかもしれませんので、少しだけ、ベルクソンによるプロティノスの意識論・時間論の評価ポイント、あるいは自分の学説との類似点について述べて、私からのコメントを終わりにしたいと思います。

この講義の一番の特徴は、プロティノスを心理学者として評価していることです。これは219頁あたりでベルクソン自身が要約していることです。この点については、こ

の翻訳のプロティノスやギリシア語の問題などについての校訂を引き受けてくれた、私と同世代の研究者の持地秀紀さんの論文（「ベルクソン講義録『時間観念の歴史』における「心理学者」としてのプロティノス解釈」、『新プラトン主義研究』、第17号、2017年、85-97頁）がまさに扱っている論点なので、時間があればぜひ参照していただきたいのですが、そこから私の理解する限りで二つほどポイントを紹介したいと思います。

一つは、プロティノスをどう評価しているかというところで、一般には外的な、測定可能・客観的な時間が本当の時間、先ほどの青山さんの話だと、系列とか、そういうものが認められるようなものをまず時間として考えるのが通常ですが、この講義では内的な時間意識のほうが真の時間だという観点からプロティノスが評価されています。これが心理学ということの一つの意味です。

講義から引用します。「プロティノスの独創性はすべて、この理論の心理学的な性格のうちにあります。時間のあるところには魂があり、時間とは魂そのものだという議論です。時間とは心理学的な性質のものだということです」（220頁）。先ほど紹介したとおり、プロティノスは、最終的にはベルクソンの見立てでは自由を永遠なものに回収してしまうような形で議論を進めていくのですが、時間について、最初の段階では心的なものとして捉えていて、その段階については、ベルクソンの観点からも評価できるというわけです。

もう一つが、今見たような心的な時間についての理解を一般化することで、時間そのものについての理解が得られるという形で議論を進めている点です。これも引用しましょう。「彼〔プロティノス〕がどう時間を発明していったかという観点からすると〔…〕どうも彼は、個体的魂から出発して宇宙靈魂に至っているように思えるのです。ところで意識における内的展開と個体的魂の関係は、時間ないし持続一般における展開と宇宙靈魂の関係に等しいわけで、まさしく、個体的魂と発展のほうから宇宙靈魂へ向けて出発することによってこそ時間の魂の発展を理解できるようになる」。

先ほども言ったとおり、議論の構成の順序という観点からすると、青山さんの指摘されたように、永遠のほうからというのがどうしても出てきてしまう。永遠のほうから出発して現象的な時間に至る、そういう流れがあるのですが、ベルクソンが強調しているのは逆で、そもそも着想がどこにあるかという、発想の観点です。そこから考えると、まずは個別の魂のうちで心的な時間を見いだして、それを宇宙の時間のほうへ拡張したのだ、一般化したのだと読める、そういうようにプロティノスの議論を捉えようとして

いるということです。

今述べたことのうち最初の点、心的な時間を強調する論点は、もちろん『試論』のひとつの重要なテーゼですし、二番目の、心的な時間を一般化することで時間そのものを考えようという観点は、『物質と記憶』以降のベルクソンの方針とほとんど同じものと言えると思います。

こう考えると、講義のプロティノス解釈は、線のイメージや、先ほど言った出来事の順序を問題とすること、あるいは前提とすることの多い「時間の形而上学」というよりも、ひとまずは時間意識論、時間経験論のほうから考えたほうがよく理解できるのではないかと私は思います。

とはいえ、解釈から離れてベルクソン自身の立場から、永遠とか系列の問題についてコミットすることはもちろんできると思いますが、私自身は、どちらかといえば時間意識の問題の方に取り組んできたので、形而上学、A 系列とか B 系列、あるいは永久主義という問題については、この後、リプライや全体討議などで、平井さんの方から応答していただけるのではないかと期待しています。

#### リプライ 平井靖史

○藤田 ありがとうございます。では続いて平井さん、よろしくお願いします。

○平井 本日は、どうも皆さま、お集まりいただき、ありがとうございます。青山さんと森田さんを招いてベルクソンの議論ができるという、私が一番おいしいような企画ですが、本当に光栄に思っています。

森田さんと青山さんとは別のお仕事でも、今日も引用すると思いますが、森田さんが編纂された『〈現在〉という謎』という論集（勁草書房、2019年）を、昨年、このコレージュ・ド・フランス講義と前後して出版されまして、そちらでも一緒にお仕事をさせていただきました。本日はよろしくお願いします。

まず青山さんのコメントに対して私が理解できたことをきっかけとしてお答えしていきたいと思います。

非常に丁寧に講義録を読解していただいて、そこから非常に青山さんらしい議論の骨格に関わるご批判、コメントを頂いたと思います。つまり、プロティノスの議論は、それ自体では整合的に読める、それに対してベルクソンは、ある意味自由とか直観を持ち出してきて、外から批判しているように見えるが、これはどういうことなのかという、

当然の疑問です。それに対してお答えして参りますが、先にポイントをお話ししておきます。

まずベルクソンの哲学史観です。彼が過去の哲学者をどういふつもりで読んでいたのか、そこに彼の哲学者としての姿勢がよく現れていると思います。つまり、非常に内在的に読もうとするのです。これを「聴診」という言葉で杉山先生は特徴付けていますが、哲学全体に対する態度なので、哲学史に臨むときも彼は哲学者として内在的な態度で臨みます。従って彼自身、整合的な解釈を出したいわけです。ただ、そこで終わらなくて〔対象に対して外在的に見える〕直観が出てくるじゃないか、それはどういうことなのか、という点について少しお話ししたいと思います。

二つ目は、プロティノスは最終的には限界がある、つまり永遠から出発している点で、元の出発点で足を踏み外している、ボタンを掛け違えているのだという捉え方になると、そこからベルクソンがいいところだけをそもそも引き出せるのか、学べるのかというご指摘への応答です。哲学史において何を学ぶかという一般的な問題としても、私たち自身が哲学史を研究しているので、自分にはね返ってくる問題だと思って答えたいと思っています。

この点について私が指摘したいのは、まず思考の「道具立て」です。ここで言う道具立ての例として、例えば減算という発想、つまり引き算で何かを出してくるという発想とか、緊張と弛緩とか、運動に内部があるとか、そういったアイデアがあります。それによって物の見え方ががらっと変わるという経験というものが、誰しも哲学を研究しているとあると思いますが、そういう鍵になるイメージのことを考えています。あるいはモデルと言っていいのかもしれませんが。こうしたものについては、単純にここから継承したとか、因果的な影響があるとか、外から批判するとか、どちらが勝った、負けたとか、そういう話ではないということです。

三つ目は、系列性がどこから出てきているのかというのが疑問点としてあるでしょう。

### ベルクソンの哲学史観

では一つ目から見ていきたいと思っています。まずベルクソンの哲学史観ですが、これはテキストを引用します。

こう言ったからといって私は、彼らが無限小から多くの重要な帰結を引き出すことができないでいたということを言いたいではありません。そうではなく、私が言いたいのは、彼らが無限小から引き出す諸帰結は常に、個々の数学者が持つ固有の才能、その独創性に負うものとなっていた、ということです。実り豊かなのは数学者の精神であって、方法そのものではなかった、ということです。（271 頁）

プロティノスの考えは実に創意工夫に富んでいます。（243 頁）

ベネデッティは... まったくもって独創的な考察によって（266 頁）

最初の引用が近世の科学者のところ。無限小については、後で森田さんのところで話題になるかもしれませんが、ベルクソンは無無限小概念自体そのものについてはたしかに批判的なのですが、ではそれに関わった人々の探究が不毛だったかということ、それは逆で、むしろそこからこれだけの成果を引き出してきたのは、個々の数学者・科学者の才能のゆえなのだということで、非常にリスペクトしています。

プロティノスに関してもそうですし、ベネデッティとか、至るところでそれぞれの哲学者の、柄谷行人なら「可能性の中心」——古いので年がばれますが——と言いたくなるような読解をしているということです。

思想家にたいして、外から経験論とか何々主義とかレッテルを貼るのをやめて、テキストに潜り込む、ダイブすると、初めてそこで哲学者がつかもうとしていた、つかもうとして一生つかめなかった単純な直観に肉薄できるということです。もちろん、その哲学者ですらたどれなかったので、自分がいけるとはベルクソンも言いません。でも、そういうものを目指すことがまず大事なのだというのがベルクソンの哲学史観の中心にあって、これはもちろん哲学史に限らず、哲学全般が、自由という課題について考える、時間というテーマについて考えるといったときに、名目的な定義とか論争の跡をたどるとか、それはそれでたしかに下準備としては大事ですが、それが本体ではない、というところが彼の中にはぶれない形であるのがここによく表れているのではないかと思います。

では具体的にプロティノスをどう読んだかということを見ていきます。先ほどこれは

青山さんがご自身で簡潔に要約してくださったので、私はさらっと、それを思い出していただくだけにしたいと思います。三段階です。三つの位相があります。

まずは、現代でいえば心的因果（mental causation）と言いたくなるもので、魂が自然法則に介入しなければならないが、それをどう実現するかです。先ほどの青山さんのお話を聞かれて、プロティノスは三世紀の人だから近代科学とか法則がないはずだと思ったかもしれませんが、これはベルクソンがきちんと引用しています。「因果性の原理」とか「事物の連結と秩序」という言い方をプロティノスは用いていて、結局、今の私たちとパラレルなことを考えている。世界の側にある種私たちから独立した秩序が既にあるのだと、そこに魂がこのこやってきて、どうやって介入するのだという問題です。これは自由にとって根本的な問題で、ベルクソン自身が、「現代人であってもこれと別の仕方では問を立てたりしないでしょ」と書いています。そういう定式化をプロティノスが既にやっています。これが、ベルクソンがプロティノスに注目する一つのポイントです。

二つ目、そこからの道行きは先ほどの青山さんがたどってくれたとおり、実際には〔心的因果は〕無理だということがすぐに発覚します。そうすると、次に打つ手は、自然がやっていることを私もやっています、自分の意思でやっています、やり直すのですという解決で、「予定調和」説です。この本の最後で〔予定調和説で有名な〕ライブニッツが出てきますが、ライブニッツは少しかわいそうです。プロティノスの二番煎じでしかないような位置付けをされてしまって、少し辛口です。

三つ目、最後は結局、自由を必然性と合致したものと考えざるを得ません。必然性と対立するものではなくて、必然性こそが自由だと考える、そういう発想の展開です。先ほど青山さんもおっしゃいましたが、スピノザとか、現代でいう両立主義的な立場だと要約できる論点になっていると思います。

### 整合性と接地

問題は、こういう一つのアーギュメント、一つにまとまった議論に対してベルクソンがどういうスタンスを取っているかということ、これが青山さんのコメントの核心だったと思います。

まず先ほどちらっと言いましたように、この整合性、この導出、プロティノスがこのように順番に議論を進めたこと自体は、まさに整合的です。ベルクソン自身がまさにこ

れを積極的に再構成しています。これは「必然的に通ることになる三つの段階」(246頁)です、と。別の著作『物質と記憶』から引用ですが、「計算をたどるということは自分でやり直すことだ」(MM, 129<sup>11</sup>)ということ、解釈とは何かを巡る議論をしている箇所述べています。実際にプロティノスがどういふ思考の歩みをたどったのかをきちんと自分でたどり直して、必然性を再構成することをやっています。ただ、論理的な整合性だけでは終われないという、ここからがポイントです。

『思考と動き』という本からですが、「实在を相対的に認識するだけでなく…内部に入って直観する」(PM, 181)、それが哲学、形而上学の仕事だと言っています。対象を相対的、つまり関係で捉えていく関係主義的、相対的な認識の仕方は不要だとは言いません。それはまず要りますが、他方で絶対的な認識、つまり内部に入るといふことも必要です。「直観」といふ言葉に注意していただきたい点があつて、現代の分析哲学でも「直観」といふ言葉は普通に使いますが、ベルクソンは特別な意味でして、直接知のことです。実際にダイレクトに物事を把握するといふ意味です。間接的な、表象的な認識に反対する概念で、文脈によっては知覚の言い換えて使つたりします。対象を直接認識することを言っています。

特にこれは時間を巡る争いなので、今出てきた「絶対」といふ言葉が時間について出てくると、有名な時間に関する絶対主義、関係主義論争がありまして、ニュートンとライプニッツが闘つたわけです。ニュートンでは絶対空間、絶対時間がありますが、それはベルクソンに言わせれば、これは後で議論になるかもしれませんが、知的な構成物であつて観念でしかありません。

そういう意味でいふと、ベルクソンは関係主義ではないでしょうか。つまり相対主義者ではないでしょうか。実際に彼が世界の中の相互作用を語るときは、「系に相対的」といふ考え方で一貫していると思います。絶対的に俯瞰した全てに統一の実感、現在とかはない、そんな意味での時間はない、といふ言い方をするので、局所的なローカルな系に相対的に考えていくといふ意味では相対主義的なんです。これは後で出てくるといふますが、凝縮理論でもそういう議論をしています。

ですが、相対的なものでは終われないのです。時間の問題ではとりわけそうです。時

<sup>11</sup> ベルクソン著作からの引用は、慣例に従い、著書略号に PUF のカドリージュ版のページ数を添える。



計に関する彼の議論をよく学生に話すときにこういう例え話をします。ある時計の一秒がずれているかどうかを確認するときにどうやるかという、ほかの時計を使うしかありません。どこまでいってもほかの時計を使うしかなくて、時計と時計がお互いにつじつまを合わせていきます。だから時計の時間は、お互いはつじつまが合っているのですが、これを全部二倍にしても誰も気が付かないとベルクソンは言います。

言語の接地問題、シンボルグラウンディング問題（記号接地問題）というものがありまして、それと似ていると思って、私は最近、「時間接地問題」と呼ぶことにしています。記号接地問題は、人口知能とかでよく話されます。単語の意味を全部辞書的にインストールする。例えばパソコンの辞書アプリには、日本語の単語の意味が全部書き込まれています。単語と単語の相関関係は全部書いてあるわけですが、じゃあそのアプリがこれを「理解」しているかという、理解していない。「中国語の部屋」（サルが提唱した思考実験）とかもそうです。だから時計が時計を参照し合ってお互いにつじつまは合っているのですが、それで時間の話は済むのという、済まないというところが似た問題になっているのではないかと思います。

もちろんそれは、ニュートンの絶対時間に戻るということではありません。ベルクソンは、ある箇所では、絶対運動について述べています（MM, 216）。絶対運動の考え方では、あるものが運動しているか静止しているかは系の取り方によって変わってくる。基準点の取り方によって変わってくる。しかし、宇宙の全体としては動いていることは間違いないじゃないか、これはどうやって言えるのか、と問いかけます。これは純粹に相対的な相互関係だけで済む話ではなくなっているということです。同じような引用は、コレージュ・ド・フランスの講義の中でも二章で話しています（28-29頁）。相対的に知ることと内側から絶対的に知ることの違いということです。

ことがそういうことなので、たしかに整合性だけならプロティノスがやっていることは非の打ち所がないのですが、哲学としてそれでOKですというわけにはいきません。整合的ならいいのかという、そうではないということです。世界について考えていく。それをベルクソンは「形而上学」と言います。形而上学をやっているの、きちんと意味論が付いてこないといけません。それが彼のプロティノスに対するスタンスなのだと思います。

純粹に相対的な相互関係だけで済ますわけにはいきません。実際に、「動きつつある」未完了相のものを説明する責任があって、これを扱うには、「分析的知性」、整合性を

チェックするタイプの認識機能だけでは足りなくて、認識機能をもう一個私たちは持っている、それが必要だ、と。これが実在への直接知、直観・意識であるといわれています。

### 永遠から時間と意識を発生させる

大事なのは、そうした直観なり意識といったものを、ただアприオリに（なぜか分からないが）こちらにありますとあって、これがあるから使いますというのでは駄目で、それがどうやって得られたのか、直観知自体を実際に世界から生やすというか、生ませなければいけないわけです。引き出してこなければいけなくて、それが発生論的アプローチにこだわる理由です。世界に意味付けするのが、超越的な、外在的な観察者のような形で用意されている、意識が気が付いたらアприオリにいる、というのでは駄目で、そういうものがなかった世界から意識も出てきたのだ、と。だから、そこがきちんと地続きになっているからこそそれを用いて世界を直観できるという、そのルートが確保される必要があって発生論的アプローチを取ります。そして、この発生論的アプローチを最初にとったのがプロティノスです。

永遠と時間の間のデグラデーションという、「永遠の劣化版が時間だ」という発想自体はアリストテレスにもあります。ただプロティノスが新しいのは、そこを「発生させる」という点です。先ほど青山さんが図を引用してくださいましたが、最初に、永遠のさらに上、てっぺんに「一者」が付くことで（図6を参照）、そこからの躍動——「エラン」と表現しますが——によって下を出してくるという議論をつくっているということです。

これは青山さんのもう一つの疑問と関係すると思いますが、永遠から系列的な時間が出てくるのはどういうことかというのは、確かにあまり詳しく説明されていないかと思います。これはプロティノスの影響を受けているといわれているアウグスティヌス——この本の中に、そもそもアウグスティヌスが出てこないのは大問題で、合評会のたびに話題になるのですが、今日はあまりそれには触れませんが——は、有名な言い方をしている、永遠は「緊張」で、時間は「弛緩・分散」している、だらけているのだ、と。永遠はきゅっとなっているのですが、私たちが現在とか過去とか未来を、現在のときは未来が見えないと言っているのは、これがたるんでるからで、緩んでいる、伸びきってしまっているからで、永遠はそれが全部きゅっとなって、その中に過去も永遠も未来もあるから永遠なのだということですが、

永遠と時間の関係を緊張と弛緩で捉えます。distentio は中公の訳（『世界の名著』、山田晶訳）では「分散」と訳されたり「延長」と訳されたりしていますが、普通のわれわれの現代語でいえば弛緩です。緊張に対して緩む、détendre というフランス語になります。テンションが取れているということなので、緊張が緩まっているという状態を指します。緩んでいることによって「びよーん」となっているということです。さらにさかのぼるとこの発想がプロティノスにあるという、これが彼の着眼点で、ここが先ほど引用してくださったような論点です。

このプロティノスの考え方から、今言ったように根本的には直観で違うと言いながらも、できるだけ積極的に拾い上げているわけです。そこから彼が何を取り出したかという点ですが、私はこの解説も詳しく書いたのですが、「減算で発想する」というアイデアで、これは、すごく一般的な思考のモデルと言っているのではないかと思います。

意識は、意識の存在しない状態から脱中和で生じるという考え方です。最初の「存在しない状態」は、プロティノスでは永遠ですが、われわれだと物質のことを考えると、そのような意識の存在しない状態は、ただの絶対無なのではなくて、プラマイゼロという「中和」の状態なのだと考えます。中和によるゼロです。そうすると、中和が崩れれば意識が出てくるということで、後で追加する必要がないという考え方です。これはプロティノスだと、第三のアンティレープシスという——分裂とか疎隔化の契機だと私は解説しておきましたが（416 頁）——ものに対応しており、ベルクソンも遅延を使って脱中和するという議論で意識を出してきます。

この減算というアイデアは、常識的な考え方の裏をかくということです。普通はこう考えるわけです。ただの物質には人間の持つような意識がない。それに対して、自然の推論として意識はクオリアとかを持っている。これは積極的な何かだ。そうすると、物質知をつくっただけでは足りないから、プラスアルファで何か追加が起きていないと現状の意識が存在できない。と、こんな発想です。しかし、これが一つの思考のバイアスでしかないというのがこのアイデアのポイントで、こういう発想そのものへの代替案として出していきます。

私がよく例として説明するのは、色を説明するときに色の三原色と光の三原色がありまして、無色の状態からある特定の有色、赤なら赤を取り出すときのやり方の発想が全く変わってきます。色の三原色ですと、当然絵の具を「追加」しないと赤い色になっくれないですが、光の三原色では、全てが中和して無色の状態になっているので、そこ

から「減算」します。つまり、無色からほかの青と緑を消せば赤色が出てきます。夕日が赤いのは同じ仕組みですよ。

二つの考え方で、どちらが勝ちとか負けとかはないといえないので、単純にこうすればこうなりますという形で、どちらのモデルが適用されるべきかを論証的に導き出すことができないようなものになっていて、実際に当てはめてみるしかないという感じです。やってみないと分からないという性格が根本的にあるのだという考え方です。同じような中和の考え方は、皆さまもお持ちのイヤホンなどのノイズキャンセリング機能などにもあると思います。

そうすると、減算説という考え方が出せます。ただ、先ほどから青山さんも指摘してくださったとおり、出発点が違って、プロティノスは永遠からですが、ベルクソンは持続から出発するということを何回か青山さんが強調されていたのですが、方法的にはまさにそうです。方法的には、持続が必要です。持続に立たないことには持続は得られないところがあります。飛び込んでみないと見えない、やってみなければ分からないという、「アポステリオリズム」と私は呼んでいます、あります。

ただ、題材の秩序というか、世界の側の順序としては、いきなり意識が最初のビッグバンのときにあるわけではありません。それはベルクソンもそうで、物質から持ってくるので、ない状態から意識を出してくる場所では議論の枠組みは一緒で、そこに実際に減算説を適用できるということです。そういったことを言っています。

ここはスライドを用意していましたが、時間になってしまったので、ごく簡単に。

物質世界では、作用・反作用が瞬間で相殺してしまうのですが、生物がいると、これが遅延するという話です。作用に対して部分的に反作用が遅延するので、瞬間でスライスした空間で見ると、その部分だけ減算された形になるという発想で彼自身の中に生かされています。

時間の系列性は、先ほどプロティノスではどうなるかという話をしましたが、ベルクソン自身では時間の系列はどうなっているのか、これはこれで結構大きな問題です。もう時間になってしまったので、今日は私の話ではできませんが、一点だけ紹介しておく、伊佐敷先生の論文<sup>12</sup>がありまして、保存の順序と系列の順序を区別されています。

<sup>12</sup> 伊佐敷隆弘「何が記憶を一系列に並べるのか」、平井・藤田・安孫子編『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』（書肆心水、2016年）所収。

ベルクソンは、実際に保存されていくのを順番に考えているのですが、保存された過去を底面 AB という「面」で描いています（図8）。青山さんがおっしゃっていましたが、これは断じて「系列」ではない。なぜ面で描いているのかということです。つまり保存されている記憶そのものは線形をなしてはなくて、そこに配列という処理を加えるという二段階になっています。まず保持されなければいけないのですが、保持されたものに配列を与えて、線形、時間を出してくるという議論になっています（DI, 89-90）。ただ、これはベルクソンに関する発生、系列の時間のお話ですので、プロティノスに関する話は先ほどお話ししたとおりということで、私からのリプライを終わりにします。

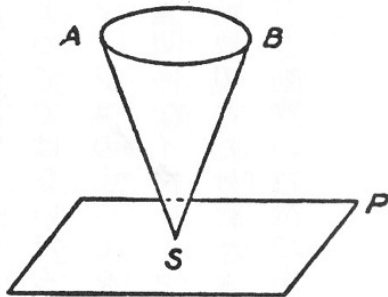


図8 ベルクソンの逆円錐図  
（『物質と記憶』より）

○藤田 ありがとうございます。本当は、後半部分の飛ばされたところなどをまだまだ伺いたいところですが、最後の総合討議で、もし時間的に可能であれば詳しく説明していただければと思います。

では、しばし休憩に致しましょう。

（下篇に続く）